Q-5　南三陸町戸倉波伝谷地区　2012 年 2 月 29 日（水）

報告者名	政岡　伸洋	被調査者生年	1948 年（女）
調査者名	政岡　伸洋	被調査者属性	波伝谷仮設住宅自治会長、農漁家レストラン経営
補助調査者	遠藤　健悟		
	大沼　　知		

漁業と農業の現状

漁業に関しては、漁師の意気込みもあり、すでに養殖イカダが多く浮かんでいて、海の復興は早いと感じている。「がんばる漁業」に関しては、小山漁業部の人たちが網作りなど手伝いに来てくれて、昨年の早くから土俵を入れるなど、いろんなことに携わってくれた。秋には、秋鮭もいくらかとれた。

話者の息子さん（現当主）も「がんばる漁業」に参加している。組合員一軒から 1 人入っている。今後、ギンザケ、ワカメ等の養殖が忙しくなると、本人以外に女性も参加することになるであろう。はっきりわからないが、女性は組合員の半分ぐらいの収入になるのではないか。組合員は日当 10,000 円くらい、女性に関しては 5,000〜6,000 円くらいではないか。

震災以前の漁業の方が、朝早くから漁に出るなどきつい面もあったが、収入は以前の方がよく、がんばった分、自分の収入になるので、現在の共同形式とは違う。現在、ワカメの養殖を行っているが、現在の値段はすごく良い。

これに対して、農業の方はというと、震災以前から畑だけで生計を立てていた家は多くはなかったが、田や畑は海水に浸かり、がれきの片付けだけで手いっぱいの状況で、このままではとてもではないが使えない。また、農業に関しては、国等の補助の話もない。

震災当時の様子

話者は農漁家レストランを経営しており、地震発生時には他の女性 3 人と一緒に、話者の経営する直売所のところでワカメの芯ぬきをしていた。地震の後、家にいる 80 歳近いばあちゃんのことが心配で、すぐに戻った。また、お孫さんも学校が休みだったので家にいた。自分の部屋まで行ったが、その時は大丈夫だった。すぐに、ばあちゃんだけを車に乗せ、お孫さんには早く逃げるように指示だけして、現在は伝谷仮設住宅が建てられている高台の前山にある話者のブルーベリー畑まで避難した。その後、ここには同じように逃げてきた人が集まってきて、最終的には 30 人くらいになり、海の方を見ていた。

話者は、小学校 6 年生の時にチリ地震津波を経験しており、その時は自宅の裏山からずっと海を見ていた。その時は竹島のところまで歩いて渡れるくらい潮が引き、海底がはっきり見えたのを覚えているが、今回の津波はそれほど潮が引かないと思って見ていたら、1 メートルくらい下がって、すると少しずつ盛り上がってきて、釣具屋さんの所から防波堤を乗り越えて津波が押

し寄せてきた。そのうち、バリバリと不気味な音がしはじめた。

話者のお孫さんは、そのまま家にいたが、津波が来たので屋根の上に逃げていた。家が流されはじめたので、裏の山に逃げようと思ったが、危ない気がしたのでそのまま乗っていた。その姿を見ていたみんなが、がんばれと声をかけ続けていたが、引き潮前の静かになった一瞬のうちに同じように流されてきた家の屋根を乗り移って、最後は泳いで話者の避難している山まで逃げることができた。

地震が来た時、ここまで大きな津波が来るとは思わなかった。避難訓練などをしていたので、高台に逃げたが、今回の規模は予想もしてなかったので、着の身着のままで位牌や財布も家においたままで、ばあちゃんだけを連れて避難していた。

震災当日は寒かったが、避難した場所には別荘があり、そのカギを管理していた人もここに避難していたことから、その中に入り、高齢者が多かったので、みんなで薪ストーブをたき、そこにあった毛布にくるまって、一晩そこで過ごした。のどが乾いたら、ちょうどこの日は雪が積もっていたので、これを取ってきて鍋で溶かして飲んだりした。話者の長男（現当主）は沖だししており、この時には連絡が取れなかった。暗くなる少し前には、すべてが津波で流され、何もなくなっていた。一晩中、波が行ったり来たりしていたという。魔王神社のところにも避難している人がいて、そこから煙があがっていたほか、他の所からも煙があがっていた。海洋青年の家の方に避難した人もいたようだ。また、聞いた話によれば、第一波はそれほどだったが、これが引いて第二波のときにはすごく潮が引いたそうである。津波が来るのが夜だったら避難する人も少なかったと思うので、津波が来るのが夜でなくて良かった。

チリ地震津波の際には、戸倉小学校に古い木造の校舎があり、2 メートルくらいの津波が来て 1 階が水に浸かった。直売所のところにあった話者の家の倉庫も流されたが、この時波伝谷で流出した家は何軒もなかった。今回の津波もチリ地震津波も、漁協の方から来た波と、ヌマカの辺りから入ってきた波が明神沼のところでぶつかりすごかったが、今回の津波はチリ地震津波のときに大丈夫だった話者の自宅の裏山も越えて波が来た。家の屋根を越えるくらいの高さの波で、戸倉中学校の 1 階も浸かり、避難してきた車も流されるほどで、話者のベッカの中学生も、ここで流され亡くなった。裏から来る波がすごかったそうである。今思うと、戸倉中学校の 1 階まで波が来るとは信じられない。今回の津波で、波伝谷ではご夫婦 5 組など 16 人の方が亡くなった。また、震災後にも 2 人亡くなっている。

避難所への移動

震災翌日も、まだ波が行ったり来たりしていた。一人なら逃げられるが、ばあちゃんと一緒で車も動かせる状態ではなかったので、逃げられるか心配だった。しかし、歩いて海洋青年の家へ移動することになった。

海洋青年の家に着いたのは、3 月 12 日の午前 10 時ごろで、とにかく体育館へということで長靴のまま入り、他の人も集まってきて、そこに布団を敷いて寝た。波伝谷の人は、ほとんどここに避難しており、200 人近くの人がいた。海洋青年の家は宿泊施設なのでよかった。ちょうどこの時、実習の授業で志津川から高校生が何人か来ていていろいろと手伝ってくれた。調理師もいて人も大勢いたが、調理器具などは揃っていた。

震災翌日（3 月 12 日）から、男性を中心に被害の様子を見ながら、食料などを探しはじめていた。海洋青年の家で、避難所の役割分担が始まったのは 3 日後くらいで、物資班や給食班など、区長さんを中心にして自然と始まった。ただ、トイレの水がたいへんで、洗い物も下の沢まで行かなければならなかった。

話者は、5、6 日後に、高齢のばあちゃんと一緒だったので、妹が嫁いでいる登米市へ向かった。道路はがれきや破損で通れなかったので、登米市に知り合いのいるお年寄り数名と、避難所から道路が使えると聞いた折立の黒崎のはずれまで船に乗って向かうことになった。船での移動に際しては、がれきがスクリューに絡むとたいへんなので、男性 2 名を見張りに立たせて移動した。折立に着き国道 45 号線まで出ると、ホテル観洋に勤めている人の車があったので、それに乗って横山まで行った。話者は、海洋青年の家へ残って炊き出しなどをしたかったが、ばあちゃんのことも心配だったので、その後も息子さんやお孫さんが残っていたこともあり、横山と海洋青年の家を行ったり来たりしていた。折立から海洋青年の家までは、道路ががれきで通れなかったので、歩いて移動していた。

4 月 4 日には、ばあちゃんと一緒に鳴子へ移動することになった。息子さんは海洋青年の家に残ることにした。鳴子に移ったのは、南三陸町の指示があったからで、話者を含め、鳴子ホテルには 160 名ほどが避難していた。そのほとんどは戸倉地区の人だった。鳴子ホテルでは、みんなが親切で温かく迎えてくれたので、心が安らいだ。でも、状況が状況なので、どんなに温泉に入ってもリラックスできたというようにはならなかった。ここでは世話役も決めていた。鳴子ホテルには 7 月 28 日ごろまでお世話になって、その後は同じ鳴子にある農民の家に移った。波伝谷仮設住宅が 8 月のお盆のころに完成したので、8 月 22 日に波伝谷に戻ってきた。

波伝谷仮設住宅

波伝谷仮設住宅を建設するまでの経緯は、海洋青年の家等での共同避難生活がたいへんだという話を聞き、私有地の高台にも 5 軒ぐらいあれば仮設住宅を立てられるという話も聞いたので、話者のヤマ（私有地）に建設しようと考えた。また、波伝谷のお年寄りが遠くの仮設にいってバラバラになるのはたいへんだと思ったことも理由の 1 つであった。波伝谷仮設住宅の土地は話者を含め 3 軒の土地を使っている。

仮設住宅に土地を提供しようと思ったのは、鳴子に避難しているときであった。はじめは、サワの人たちで相談しそれでやろうとしていたが、他にも仮設住宅に入れない人がいるので、声がけした結果、23 軒の希望があった。その後、津の宮の仮設住宅が 5 軒あいていたので、最終的に 18 軒がここに住むことになった。ここには、波伝谷の人たちだけが暮らしている。

波伝谷仮設住宅の自治会について

波伝谷仮設住宅では、自治会をつくってくださいという指示があったので、つくることになった。主な活動としては、行政との連絡やボランティアへの対応である。自治会長は現在、話者が務めている。入居前から、声がけして土地も提供してくれたので、みんなが話者にという話になったので、まずは 1 年ならということで引き受けることになった。

第 1 回目の自治会は 9 月に開かれた。ここで話者は正式に自治会長となる。その後、毎月 3

日に定例会が開かれ、行政への連絡や道路をはじめさまざまな動きに対する情報を報告している。この自治会に加入しているのは、波伝谷仮設住宅に住む 18 軒で、役職としては自治会長のほかに、副会長と会計、連絡員がいる。連絡員は、物資が来た時、ボランティアがいつくるか、オチャッコカイ（お茶会）がいつあるかなどの連絡をまわしている。また、自治会費は月 1,000 円となっているが、これを徴収するのも連絡員の仕事である。このほか、忘年会や、仮設で亡くなった人がいたので今年は中止となった新年会、花見などの連絡もする。昨年の忘年会は、波伝谷仮設住宅の集会所で行い、お酒や刺身も買ってきて、子どもなどは仕出しも出して、ここに入居する人全員でと声をかけたが、集会所のスペースが狭いので 1 人ずつしか来なかった。つぎは、春くらいに花見ができればと思っている。

オチャッコカイについて

オチャッコカイをはじめたのは、9 月か 10 月くらいだった。宮城県グリーンツーリズムの人が来て、海洋青年の家や佐沼に避難している人たちに声掛けをして、餅などを持ってきてもらい、炊き出しのようにして始められたのが、現在のオチャッコカイのスタートであった。これは、毎月第 1 および第 3 水曜日に社会福祉協議会の支援員さんのお世話で開かれいるが、さらに第 2 水曜日にもボランティア団体のお世話でやることになり、現在では月 3 回行われている。曜日を固定したのは、佐沼や柳津に避難している人も参加しやすいように考えたからである。これに参加するのは女性で、これ以外にも毎日のように、どこかの家でオチャッコ飲みをやっている。女性は元気なので、オチャッコ飲みは震災前から近所の人たちとやっていたが、震災後、女性は畑仕事など何もすることがなくなった人も多いので、よくやっているという。

現在行っているオチャッコカイは、午前 10 時から 11 時 30 分まで波伝谷仮設住宅の集会所談話室で行われている。この談話室は、波伝谷仮設住宅に住む人が気軽に集まれる場所になっており、乾燥機も寄付してもらったので、誰もが使えるようにしている。

野菜作りのグループ活動

話者は、国に申し込んで、仮設の人たちに食べてもらえるような野菜作りの事業をできればと考えている。まだ申請段階であるが、健康のためにも、震災以前に野菜作りをやっていたおばあさんたちを指導員として活動したいそうである。

話者の今後

話者は、震災以前には農漁家レストランを経営しており、早くに亡くなったご主人との思い出や、その後の暮らしを支えてきた思いもあるお店であったが、それが流されてしまって何もなくなってしまったが、それにばかりすがっていてもいけないと考えている。以前のような予約制のコース料理を出すのは不可能にしても、以前あった直売所あたりに定食程度のものを出すようなお店でももてればと思っている。また、ボランティアとの交流も大切にしていきたいと思っていおり、波伝谷に来てもらった際には、簡単に食べてもらえるようなこともしたい。このほか、今回の東日本大震災の語り部としての活動もやっていければと思っている。